

激動の青春（旧制中学時代）

加藤 修一郎

（入学から学徒動員まで）

昭和十六年四月八日、私は、京都市立第二商業学校（現北野中学校）に入学したが、制帽は前年までの丸帽から戦闘帽に変わり、また、同年十二月八日には大東亜戦争に突入。楽しいはずの中学生生活の第一歩は戦時一色の中で始まったのである。（この年より尋常小学校は国民学校と名称変更された。）

私たちの入学以前より校則にて、通学には一定の距離を歩くことが決められており、私は今出川通りの市電通学のため千本今出川までしか乗車できず、降車した生徒は学年順に二列縦隊に並び、そのなかの最上級生が引率して片道約二キロの道を徒歩通学した。私は剣道を正課（剣道または柔道）にしていたので、この授業のある日には防具と道着を入れた面と竹刀を手に持ち、晴れた日でも重い防

具を持つての徒歩通学、特に雪の日はつらい徒歩通学であった。

二年生になって陸上競技部に入り、短距離とジャンプで上級生よりしごかれたが、当時はスパイクシューズの使用が禁止されており植物園グラウンドで開催の京都府中学校陸上競技大会では針の抜いたシューズで挑んだため、記録的には平凡なものであったと記憶している。

昭和十八年（三年生）になると、勤労奉仕で淀兵器庫（淀競馬場で戦車や大砲の保管庫）や祝園の弾薬庫へ三泊四日で駆り出される等、満足な勉強よりも軍事教練・学校近隣の防空壕（ごう）掘りに精を出す毎日であった。

この年より予科練（海軍甲種飛行予科練習生）の受験年齢が中学四年生以上から三年生終了程度の陸軍特幹（陸軍特別幹部候補生）制度が創設され、同窓生から受験する者が続出し、終戦までに四十四人が陸海軍に入隊していった。

当時体力章検定制度（昭和十四年制定で百メートル・二千メートル・走幅跳・手榴弾投げ・運搬・懸垂の六種目）があり、私は五種目上級でありながら、運搬（上級は六十貫の俵を担ぎ五十メートル走行）では中級（五十貫の俵）しか取れず、中級バッジしかもらえなかった悔しい思い出がある。（この年理工科系の学生を除き徴収猶予制度が廃止され、大学生の学徒出陣始まる）

「学徒動員」

昭和十九年、四年生（現高校一年生）の一学期終了を待たず、学徒勤労働員実施要領により京二商生（三・四・五年生合計七百五十名）は、舞鶴海軍工廠（しょう）での軍艦造りのために動員され私たち四年生は七月三日教練や査閲に使用するための剣帯をつけ、三八式の歩兵銃を担ぎ、ゲートルを巻いてのいでたちで、京都駅より東舞鶴の森寄宿舍（三・五年生は天台）に入舎。海軍入隊時まで十か月間、ノミやシラミに悩ませられなが

らの共同生活に入った。

海軍工廠に入廠して最初の作業は、海軍機関学校（現海上自衛隊舞鶴地方総監部）での基礎教育、最初はタガネをハンマーでたたき鉄板をハツル訓練でタガネを打つよりも親指や人差し指をハンマーで打ちつけて皮がむけ、指から血が止まることは無かったが、慣れるにつれ目をつぶっていても正確に打てるようになった。約一か月の訓練を経て工廠の造り、海軍に入隊するまで軍艦の蒸気タービンの羽根を専門に削っていた。工場内の主要機械はほとんどが外国製で占められ、中には日露戦争時代の老朽機械も多数あり、日本製の機械が少なかったように覚えている。

学徒は一般工員に比べまじめ（でたらめもした）に勤務するので古参者より重宝がられたものである。

舞鶴での動員生活は海軍生活そのもので

「総員起こし5分前」に始まり、五時の「総員起こし」で起床、五時十五分「食事始め」、「食事止め」五時三十分、六時に宿舎を出発、七時より作業開始、十六時半終了プラス残業時間で工場を後にする。昼食と中休みの一時間を除いての八時間半プラス残業時間（実働約十時間）の労働で宿舎に戻った後は往復一時間半の徒歩通勤の疲労と早い起床のため眠く、夕食後は何をやる元気もなかった。それでも宿舎では一部屋が自習室に当てられ、進学や軍関係に志願する者は、まったく無い授業を補うため持参していた教科書や参考書をもとに、一日一時間でも睡魔と戦いながら自習に励んだものであった。「勉強は教えられるものではなく自ら学ぶもの」である。ことを身を持って体験したのである。

十月に入ってから学徒も夜勤をすることになり、早朝に帰舎しても明るくてすぐに寝ることができず、夜勤の週は寝不足になったがこのころになると要領も良くなり、引率の

先生に残業（学徒は原則残業なし）をす
いってこの時間を睡眠の補充に当てたもので
ある。新聞やラジオでは勝ったとはやし立て
られていたが、ドックには巡洋艦利根が後部
を大破損して入り、後部半分をもぎ取られた
駆逐艦が入港、造艦した海防艦は帰投せず、
工廠では艇首に二五〇から三〇〇キログラム
の炸薬を積んだベニヤ板張りのモーターボー
ト〇四艇（震洋）生産や魚雷二本を積載の五
人乗りのミニ潜水艦人間魚雷（蛟竜）の部品
製造等、本来の軍艦を造る能力はほとんど無
くなっていったと思う。

しかしながら、私たちは皇国の不滅を信じ
、自分たちもやがては本土防衛のためこの特
攻艇に乗るときがくるであろうと思いつながら
聖戦貫徹を誓い合い生産に励んでいた。

昭和二十年一月、同級生の一人が工場で作
業中、突然、天井クレーンのロープの止め釣
が外れ、頭上から盤木が落下し彼の頭を直撃、
直ちに海軍病院に運ばれ手当てを受けたが、

そのかいもなく彼は永遠に帰らぬ人となった。

「受験」

昭和二十年一月専門学校受験のため東京へ行った。すでに東海道沿線は度重なる空襲で東京まで行けるかどうか不安であったが、リュックに食糧を詰め込み鉄帽を背負い東山トンネルまで満員の夜行列車のデッキにぶら下がりながら、翌朝無事東京の従兄弟の家に着くことができた。ところが着く早々空襲に会い、初めての空爆体験に驚愕しながら防空壕に飛び込んだが、幸いにも被爆は免れた。受験後、帰途は空襲に会うこともなく帰京し、三月上旬に合格通知を受領した。

昭和十六年より実施の戦時繰り上げ卒業（毎年十二月）の改正により、私たちは、四年終了（旧制は五年制）で卒業、旧制中学校では一番短い修学期間であった。

「海軍志願」

すでにこの時には志願兵として入隊しても、乗る飛行機も軍艦も無く、ほとんどの志願

入隊者は飛行機整備・通信兵や船舶・人間魚雷の特攻要員としての教育を受け、本土決戦に備えての訓練に励む毎日であった。

当時の私たちは高専（当時の大学は高専卒業後）や陸海軍に受験をすると、受験のため京都の我が家に帰れ外泊ができたので、手当り次第受験したものである。

工廠の弁当はみじめなもので、主食は大豆の中に米粒があり、弁当箱を横にすれば半分なもので十七歳前後の若者はたえず空腹を抱えながらも「ほしがりません勝つまでは」を合言葉に、学徒工員として日々の仕事に精励していた。私のクラスは軍人組と呼ばれ、高専進学よりも軍隊に志願するのが当然のことであると叫ばれていたので、体力に自信のあった私は軍隊志願を決断した。何に志願するか、いろいろと考え、陸士・海兵は難しいが軍隊は星（階級）の世界。少しでも進級の早いものはないかと探していたところ、海軍特

別幹部練習生（下士官速成教育）第一期生募集（中学校四年終了以上）の発表があり、内容を見ると兵長で入隊、進級も早く、先輩はいないので受験をした。競争率は高かったが同級生二名と共に合格、五月十五日技術兵長（海軍工廠の延長のような工作関係や兵舎建設等の兵科）として七つボタンの軍服を着ることができた。

入隊後は、「五分前」の行動や海軍体操等は海軍工廠勤務が大いに役立ち、陸上部でしぼられたため体操や駆け足はお手のものであったのと、下士官速成教育のため勉強に追われ、また、幸いなことに一期生で先輩はいなく「バッター」の体罰も少なく、比較的楽に過ごすことができた。

平海兵団で約二か月の練習生教程終了後、七月中旬西舞鶴の施設部隊へ転属して実地訓練を受け、復員までこの部隊で生活していたので、幸いなことに七月二十九・三十日の舞鶴軍港と海軍工廠の空爆（舞鶴鎮守府所属の

残存駆逐艦や海防艦の大半が被爆し多数沈没）では直接の被害は受けず、転属が半月遅ければ平海兵団でまともに爆撃をうけていたことであつたと思う。後日聞いたところでは造機部勤務の同級生に死傷者は無かったが、造兵部勤務の上級生一名下級生二名が戦災死、下級生一名が重傷を、負つたとのことであつた。八月十五日正午、部隊の営庭に全隊員が集合してラジオ放送を聞いたが、スピーカーから流れる放送は雑音が多くて聞き取れず、最初は本土決戦に備えての激励放送かと思つたが、後刻上官より戦争終結と聞かされ、必勝の信念で張り切り、困苦に耐えていた心の糸が一度に切れ、無念の涙が止めどなく流れたものである。（当時の私たちの年代の大半が同じ思いであつたと思う。）

終戦時海軍二等技術兵曹（下士官）に進級したものの幹部練習生は残務処理要員として残され、九月中旬に除隊し、自由の身となつた。復員時軍装一式や毛布等を持ち帰つたが

、戦後の「食糧調達の物々交換品」として無
くなくなってしまった。

復員後京都市内に進駐してきた米軍の装備
や物量を目の当たりにし、これでは勝てるは
ずはないという思いと、敗戦は信じられない
という思いとが十七歳の少年の心の中を複雑
に駆け巡ったが、発想の転換による忍耐と根
性で、戦後の混乱期を生き抜いてきたのであ
る。このつらい苦しい体験が、驚異的な戦後
復興の一翼を担う原動力になったものと信じ
ている。

「戦時中を省みて」

学徒動員・軍隊生活を通じ青春時代の一年
二か月間、団体生活で精神的にも肉体的にも
拘束され、自分の意志は全体に吸収されてし
まう拘束状態を体験したことで、今の自由が
どんなにうれしく価値あるものかがよくわか
るのである。この拘束された生活の中から得
た「根性と忍耐」「団体行動と連帯責任」
「共同生活から芽生えた友情と団結」「素早

い判断と行動」等、学校の授業では学べない貴重な体験をしたことは、その後の社会生活に大きなプラスとなり、今では「つらかったこと」は忘れ去り、むしろ「懐かしい思い出」の方が多く残っている。

学徒動員、海軍生活を通じて自分の身についたことは、すべての行動が「五分前」の号令から始まることである。自分の身についた良い習慣として、今でも無意識の内に「五分前」の行動を実行している。戦争を全面否定するのが戦後の風潮であり、戦争を知らない現代の世代からは何を今さら「軍国時代の郷愁」といわれるかも知れない。しかしながら、当時私たち中学生が聖戦貫徹のためにと、「純粋な気持ちでひたすらささげた青春時代」を「俺たちの青春までも悪」と決めつけられることの無いことを願ひ、学徒動員での艦船造りや兵器の増産、軍隊志願での隊内生活等、心身共に苦勞した体験を後世に伝えることが、祖国の繁栄と家族の安泰を祈り、お国

のためにと亡くなられた数百万人の方々への
供養になるのではなからうか。私自身決して
戦争を賛美する者ではなく、このような悲惨
な戦争を二度と繰り返さぬことを望み、平和
を心より愛することを申し添えます。